

委員御提出資料

- ・ 市川委員御提出資料
- ・ 品川委員御提出資料
- ・ 天笠委員御提出資料

市川委員御提出資料

「教えて考えさせる授業」の趣旨と動向

市川伸一（東京大学教育学研究科）

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/>

2015/4/13

「教えて考えさせる授業」の提案

「教えて考えさせる授業」（市川、2001、2004）

「詰め込み」「教え込み」: 旧タイプのわからない授業

教えずに考えさせる授業: 新タイプのわからない授業

教えて考えさせる授業

予備知識の教授により、理解・問題解決・定着を促す

中教審答申（2008年1月17日 p. 18）

「……**教えて考えさせる指導**を徹底し、**基礎的・基本的**な知識・技能の習得を図ることが重要なことは言うまでもない。」（ただし、**教材・教具の工夫**、**理解度の把握**）

認知心理学から見た「理解の深まり」

- 浅い理解から深い理解へ

知識の関連づけの成立

断片的な知識から構造化された知識体系へ

- 理解の深まった状態とは

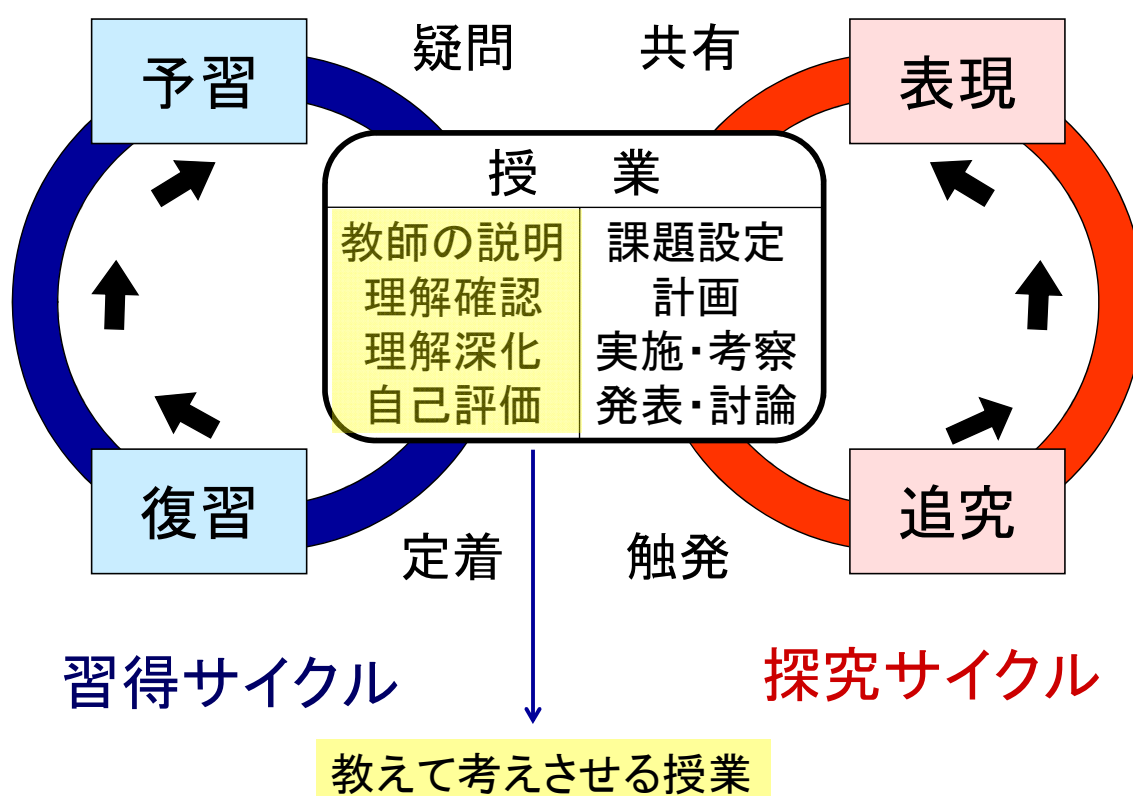
自分の言葉で他者に説明できること

意味内容に関する質問に答えられること

類似問題に転移できること

- 理解を深めるための習得学習のサイクル

受容学習／能動的表現／問題解決・討論／教訓の抽出



「教えて考えさせる授業」は何をめざすのか

- **すべての児童・生徒に、やりがいのある授業**
 - 進んでいる子に足踏みさせない
 - 遅れている子もついていける
- **教科書を使って、教科書を超える授業**
 - 予習、授業、復習での共通のリソースとして活用
 - しかし、教材・指導法・課題の工夫による教師の個性
- **確実な定着と理解・活用・思考・表現のある授業**
 - 協同学習による参加意識とコミュニケーションの促進
 - 自己評価によるメタ認知の育成

「教えて考えさせる授業」の展開状況

- **地域でいうと**
 - 沖縄、岡山、北海道で複数校の集中的取り組み
 - 個別学校での取り組み
- **学校種でいうと**
 - 6割が小学校、3割が中学校、1割が高校
 - 小中連携での取り組み： 広島、鳥取、山口等
- **教科でいうと**
 - 小学校：7割が算数、学校によっては、国語、全教科
 - 中学校：全教科、 高校：5教科

「教えて考えさせる授業」の導入校の変化

● 教員の変化

授業についての話題の共有化、日常化
教科・校種を越えて議論できる授業検討会
教育目標の明確化／指導法開発への意欲

● 児童・生徒の変化

授業進行についての明確な見通し
相互説明活動、協同的問題解決、自己評価の習慣化
予習の定着／授業でわかることへの期待・意欲
理解深化課題への期待／挑戦・達成・理解の満足感

紹介リソース その1: 書籍

『学ぶ意欲とスキルを育てる』（市川著：小学館、2004）

『「教えて考えさせる授業」を創る』（市川著、図書文化、2008）

『教えて考えさせる授業 中学校』（市川編、図書文化、2012）

『「教えて考えさせる授業」の挑戦』（市川編、明治図書、2013）

『学力と学習支援の心理学』（市川編、放送大学教育振興会、2014）

（制作中）

『教えて考えさせる算数・数学』（市川著、図書文化、2015）

紹介リソース その2: ビデオ等

『学力と学習支援の心理学』 放送大学番組 (2014~, 年3巡)
第6回: 全体的解説+算数、第9回: 理科、第10回: 社会、
第11回: 英語、 第12回: 事後検討会(三面騒議法)

『教育の最新事情』 放送大学教員免許更新研修 (2014~)
第9回: 現行学習指導要領と教育課程実施状況(市川)

ネット配信ビデオ(制作完了、配信準備中)

『実録「教えて考えさせる授業」』

① 分数のわり算(小6)、② 連立方程式とグラフ(中2)
パスワードを発行して、学校、教育委員会向けに提供

紹介リソース その3: セミナー等

東京 『OKセミナー』(毎年8月) OKJ研究開発ネット主催
『教育研究交流会』(毎年6月) 市川研究室主催

岡山 『OKセミナー in 岡山』(毎年7月)
『学力・人間力育成事業交流会・報告会』(8月、2月)
(公財)福武教育文化振興財団主催

美祢 『OKセミナー in 美祢』(昨年8月19日、第1回開催)
山口県美祢市教育委員会主催

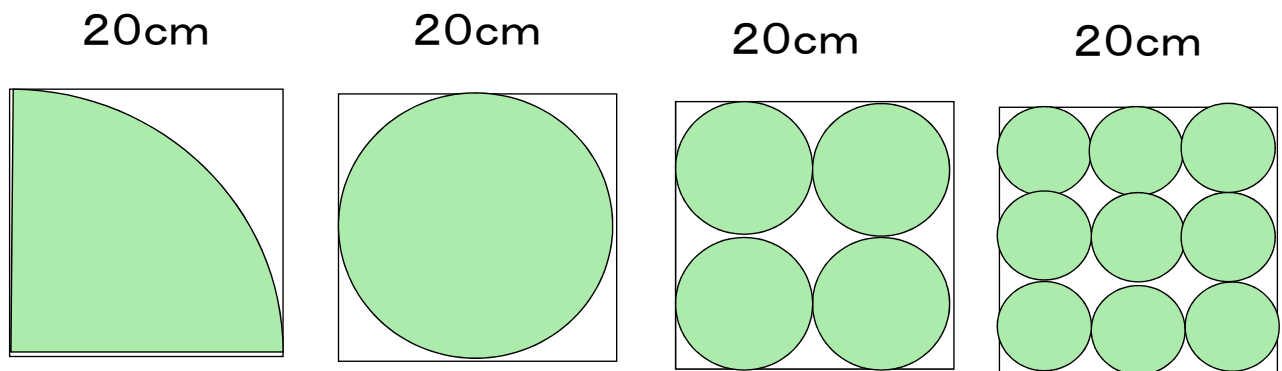
ネットによる情報提供、意見交換等

市川研究室HP, メーリングリスト「OKネット」

授業づくりのポイントはどこにあるか

- **困難度査定—難しいところにこそ、時間と工夫を**
指導書、教育書などの解説を利用
自らの学習経験や指導経験から
「子どものつもりになって」というイメージーション
- **教える場面の工夫—コンパクトに重要な点を**
ただし、単なる要約でなく、教材や教え方を工夫
- **理解深化課題の工夫—課題のレパートリーを広く**
教科書の発展問題、教育雑誌などの活用
教師の疑問／授業検討会で代替案を出す習慣

円の面積＝半径×半径×3.14



理解深化課題の代替案の例

つとむ君が、「この面積は全部同じだ。面積を計算しなくても、公式を見ればわかるよ」と言っています。つとむ君の考えを説明しましょう。

2 平成25年度の振り返り

(1) 教職員の振り返り

① 『教えて考えさせる授業』づくりに取り組んでみて感じた成果

◎生徒にどんな力をつけたいかという、その時間のゴールイメージが自分の中で明確になった。そして、そのためにはどのような教え方や教材・教具が必要か、活動形態はどのようにするのが有効か、ということを考えるようになった。

◎何を教えるのか。これが曖昧だと、生徒は意図したことを話したり、表現したりしてくれない。それをどう明確にするのか。やっと、最近になって指導要領の価値が分かってきた気がする。

◎国語や社会は難しいといわれるが、「何を教えるか」を明確にできれば、4つの段階に落としとして取り組むことは十分可能だと思う。ただ、そのためには、まず単元全体を構想した上で、1時間の授業を組み立てて行く必要がある。

◎自己評価カードは、生徒にとっても教師にとっても理解度の確認をすることができ、次時の授業を考えるのにとっても有効だった。

◎これからもこのスタイルで取り組んでいきたい。特に、価値ある深化課題を研究して、生徒の力になる教材を作成できるように努めたい。

◎説明をコンパクトにするために、ICTを活用したり、教材を工夫しようとするようになった。

◎理解確認の教材づくりに重点を置いたので、教材づくりが大変だったが、振り返ってみると自分の財産にもなっていてとても良かった。

◎『教えて考えさせる授業』づくりというテーマがあるからこそ、教科を越えて話し合いができる。そういう意味で、『教えて考えさせる授業』という柱を持つことを続けていきたい。

◎積極的に問題解決に取り組むようになってきた。

◎理解確認があることで、より多くの生徒が「わかった」という実感を持つことができていた。

◎「お客さん」になる生徒が少なくなってきた。

◎多くの生徒に「考えよう」とする姿勢が見られるようになってきた。

◎「何を学ぶのか」を意識する生徒が増えてきた。

◎自分の言葉で説明しようとする生徒が増えた。

◎習得すべき内容を使いこなして、「説明しよう」「課題に取り組もう」とする生徒が増えた。

◎生徒にとっても授業の流れがよくわかり、「これをしたら次はあれをする」という見通しを持ちながら取り組み、安心感があつたと思う。

◎課題の良し悪しで、生徒の理解状況が変わることが分かった。

② 次のステップにつなげるためのヒントとなる課題

【予習・ねらいの設定】

- 「ねらい」が曖昧だと授業も曖昧になり、生徒も困る。
- 予習の在り方が、教科でバラバラになっていた。

【教える（説明）】

- 説明の時間が長いと、自己評価まで行かない。
- 説明をコンパクトにする工夫が必要。
- 習得すべき内容をスリム化することは、毎時間は困難である。そこで、苦肉の策ではあるが、『教えて考えさせる授業』的な授業も併用している。
- 説明をコンパクトにして、理解確認や理解深化に取り組める時間を確保する必要性を痛感した。

【課題づくり・理解確認・理解深化】

- どんな課題を設定するのが難しい。
- 理解確認の形態にもっとバリエーションをつけていく必要がある

【自己評価】

- 自己評価の「分かったこと」に書けていたとしても、実際に英文を書かしてみると、書けない生徒が少なからずいる。これをどうしていくか課題である。
- 自己評価は、どの方法がより良いのか決めかねている状態である。
- 自己評価の活かし方に、もう少し研究が必要。

(2) その他

- * 『教えて考えさせる授業』をすることが目的になってしまうときがあった。生徒の学力を定着させるために、という原点を大切にしたい。
- * 「体験や経験が楽しいと感じることが勉強の楽しさだ」と思っている段階では、小学校時に基礎基本の習得が不十分な生徒にとっては、「理解深化」の課題解決は難解な学習であったように思う。基礎基本の習得は、教科の持つ本当の楽しさを感じるための重要な要素である。見せかけの楽しさではなく、本当の楽しさを感じさせていきたい。
- * 「予習」や「説明し合うこと」、「自己評価を文章で書くこと」など、小学校から経験させておくと、よりやりやすい。

(3) 生徒の感想

《2年生》 ◎：感想&いいと思う点 *：要望

- ◎この形だと、先生に問題の解き方などを教えてもらってから自分で挑戦できるから、よく分かる。
- ◎これまではそのまま終わっていたようなものだったけど、理解確認や理解深化かが始まってからは、分かりやすくなった。
- ◎あまり分かっていなかったところが授業の最後で分かるところがいい。
- ◎分かったところをさらに生かして問題を解けるところがいい。
- ◎覚えやすいところや意味が分かるところがいい。
- ◎理解確認が楽しい。
- ◎先生がみんなに教えて理解確認や理解深化をすれば、先生に教えてもらったことが分からない人は、みんなと協力しながらわかりはじめると思う。
- ◎うる覚えをしている人がいたら、理解確認とかすると分かるようになるからいい。
- ◎理解深化が好き。理解確認で分からないところを理解深化でできるだけ完全に分かることができるのでいいと思う。
- ◎終わってすぐに理解確認をするので、忘れにくくなった。
- ◎理解確認や理解深化があって、何度も復習したりできるので、よく分かります。
- ◎小学校よりこっちの方がやりやすいし、分かりやすいからいい。
- ◎1回で終わらず、何回もするからいい。
- ◎「説明を聞く」「理解したか確認する」「理解を深める」という3段階がとても分かりやすくていい。
- ◎小学校の時よりも授業がスムーズに進むような気がする。

- ◎先生が説明するとき、分からない人もいるけど、その次の理解確認をしているので、そこで分かる人が増えていると思います。
- ◎本当に分かっているか、理解確認や理解深化で試せるのがいい。
- ◎先生が、理解しているかちゃんと聞いてくれる。
- ◎すぐに復習ができて頭に入りやすい。だから、小学校の時よりも集中できる。
- ◎小学校と違って、説明を聞いただけで終わらずに、自分の言葉で使うからいいと思う。
- ◎小学校よりも分かりやすい授業になった気がする。
- ◎自己評価に書いたことを、次の授業の時に説明してもらえるのでいいと思う。
- ◎数学の自己評価は、あとで読み返してみると、授業の内容が分かるからいい。
- ◎自己評価で分からないことを書くと、先生がコメントを書いてくれるところがいい。
- ◎やっぱり、自分の苦手が分かるところがいい。
- ◎1時間で勉強したことが、分かったのか、分かってないのかが自覚できる。
- ◎最後に、理解確認・理解深化・自己評価とやって、ちゃんと分かっているかを確認られるのがいい。
- ◎とても良いと思う。これまでは、何が分かって、何が分かっていないのかが分からなかったけど、それが分かるようになったからいい。
- ◎この流れでやると、今、自分がどれだけ分かっているかが分かるのでいい。
- ◎小学校の時は苦手があっても見付からなかったけど、この形の授業は、きちんと分かっていないと進まないから、分かるようとする気持ちが出る。

*自己評価で質問したら返してほしい。

*授業のスピードが速くて分からないので、もっと遅くしてほしい。

*自己評価にコメントしてほしい。

*その時間だけ理解してもすぐに忘れてしまうので、次の時間のはじめに前の授業でやったことを確認したらどうでしょうか。

*理解確認と理解深化の違いがよく分からない。

《3年生》 ◎：感想&いいと思う点 *：要望

◎「説→理確→理深→自」という授業の流れが分かっているの、いっぺんにされるより集中しやすい。

◎最初に答えを見せてもらうことで、「どうやったらそうなるか」を考えることができるのでいい。

- ◎「説→理解→理深→自」という授業の流れが分かっているの、いっぺんにされるより集中しやすい。
- ◎小学校の頃は、この流れで先生たちはやっていたので、すぐに忘れることが多かったけど、この形は振り返られるのでいいと思う。
- ◎説明を聞くだけではちゃんと分かっているとは思えないので、理解の確認をするのはいいと思う。
- ◎確認をした上でさらに理解するために理解深化があるとこがいい。知識がもっと増えるような気がする。
- ◎理解確認の時などに隣の人や近くの人と教え合うので、理解が深まるのでいい。
- ◎説明されたことを、自分で考えて理解確認することで、聞くだけで終わるより理解できていると思う。
- ◎理解確認や理解深化の問題を解く時、先生に説明されたことを自分でまとめて考えるので、普通よりも確実に覚えることができると思う。
- ◎分かりやすいし、理解確認や理解深化で授業の内容を整理できている。
- ◎授業の内容を使って課題を解いていくから、どこが分かっているのかとか分かりやすい。
- ◎理解深化で応用力が身につくように思える。
- ◎習ったことをその時間のうちに確認・復習できる。
- ◎特に、理解確認が大切だと思う。
- ◎みんなで話し合っ解決することができるから、理解しやすい。
- ◎理解深化があったら、その日の復習ができているようにいいと思う。
- ◎先生の説明を聞いてある程度分かってから、理解確認や理解深化で自分の言葉で説明するのはいい。
- ◎先生の説明だけで終わらず、理解確認・理解深化をすることによって、身につけていること・いないこと・活用できているか、などが分かっていると思う。
- ◎この授業のいいところは、疑問が最初に分かってスッキリするところです。最初に説明してもらった上で理解確認などがあるから、分からなかった自分に気づけます。
- ◎結果（答え）を先に教えてもらうことは、小学校の頃と逆なんですけど、分かりやすくていいです。
- ◎やり方や答えを教えてもらってから問題にはいるので、分かりやすいです。それに、理解確認や理解深化をすることで、1時間で習った授業のまとめがちゃんと頭にはいって理解できる気がします。

- *全教科を同じにしてほしい。
- *理解深化などのきちんとした答えを教えてほしい。
- *もっと分かりやすく説明してほしいです。

- ◎最初に答えを見せてもらうことで、「どうやったらそうなるか」を考えることができるのでいい。
- ◎問題は解けるが、何でそうなるのか分からないことが多かったが、こういう授業の時は、意味まで分かるのでとてもいいと思う。
- ◎分かっているようで意外と分かっていなかったりするので、理解確認・理解深化・自己評価は、それに気づけると思う。自分はそういう勘違いすることが多いので、このやり方は自分に合っている。
- ◎先に説明してもらえるので、分からないところが分かるようになっています。
- ◎答えが分かってから確認をし、そのあとに難しい問題を解くから、けっこう理解しやすいと思う。
- ◎授業で習ったことが理解できているか確認ができるのいい。そして、最後のまとめの問題で、もう一回ノートや教科書を見て、授業で習ったところを振り返ることができるのもいい。
- ◎授業を聞いてから問題を解くので、その授業が分かりやすい。
- ◎理解深化の問題があるから、身につけているかどうか分かるようになった。
- ◎理解確認や理解深化で、みんなで話し合っ解決できるからいい。
- ◎分からないところも友達と話すことで分かるようになるのでとてもいい。
- ◎理解確認や理解深化で隣の人や班の人と説明し合うとき、分かっていたことが分かるようになるのでいいと思います。
- ◎学習した内容のおさらいがみんなのできるから、ちゃんと理解することができると思います。
- ◎同じことを繰り返すので覚えやすいです。
- ◎話を聞いたあと、それが本当に分かったかを確認できる問題があるところがいいです。
- ◎自己評価をすることで、自分が分かったこと分からなかったことを具体的に知ることができる。
- ◎自分の分からないところを自己評価で振り返られるところがいい。
- ◎自己評価カードを使って、分かったこと・分からなかったことの確認ができていると思う。
- ◎自己評価を書く時、今日は何を学んだかを思い出すので、大切な単語とかを頭に入れることができる。
- ◎最後に自分の分からないところを確認できる。

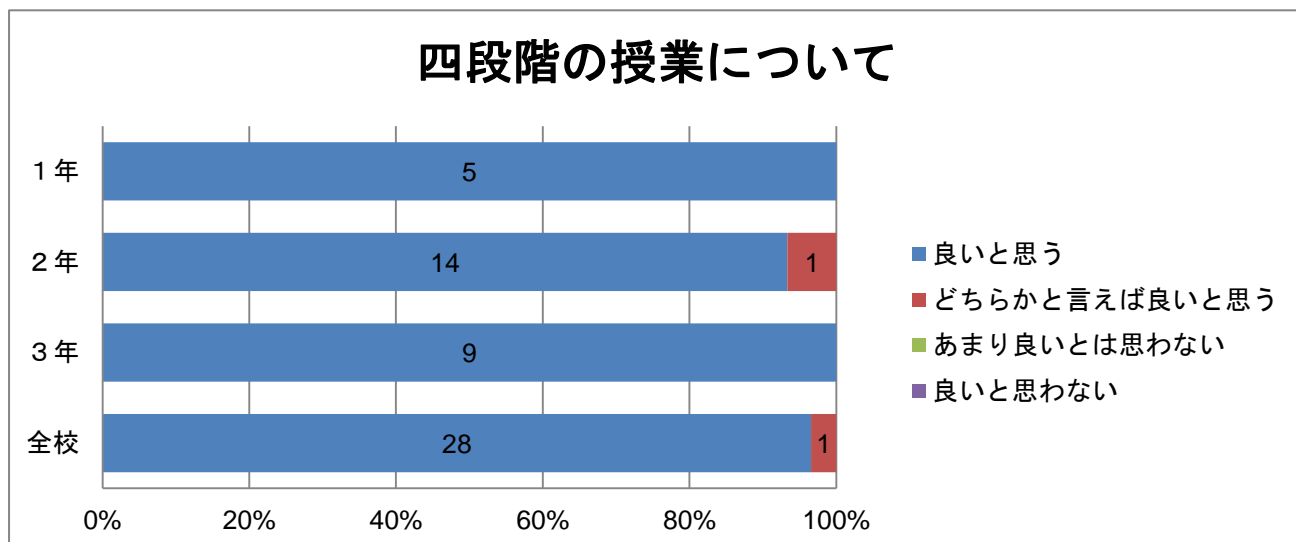
- *特定の教科でしかしていないと思う。
- *理解確認や理解深化の模範解答をいただきたい。
- *全教科でこの授業をしてほしいです。
- *すべての教科で、「ワイガヤ」をさせてほしい。

授業に関するアンケート結果

平成 26 年 12 月 17 日実施

1. ○○中学校の授業は、みなさんが毎時間の学習内容を確実に身につけ、深化課題を通して理解を深めるために、「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価（振り返り）」の順に進めることを基本としています。これについてどう思いますか。

	①授業がわかるために 良いと思う	②どちらかといえば良 いと思う	③あまり良いと思わな い	④良いと思わない
1 年	5	0	0	0
2 年	14	1	0	0
3 年	9	0	0	0
全校	28	1	0	0
割合	96.5%	3.4%	0%	0%



①の理由

3 年

- * まず、「教師の説明」というところで、わかりやすい説明を先生はされていますが、まだ、明確に理解できたとは言えません。そこを「理解確認」でしっかりと理解し、その知識を使って応用に取り組むのはいいことだと思うし、短い期間で多くの情報を取り入れられると思う。
- * 例えば、国語で「深化課題」をとっているうちに、全国共通テスト（NRT?）で平均点以下だったのが、どのテストでも平均は超えるようになってきた、文を整理してよみとれるようになったなと思うから。
- * 先生の説明だけでは、理解しているつもりでも、いざ「説明しろ」と言われたら理解できないと分かったり、分かってないことや不思議に思うことが出てくるので、理解度を深めることができると思います。特に、理科や数学などは具体例を出さないと分からないものも多く、具体例を出すためにはしっかりと理解しておかないとできないので大切だと思います。
- * 先生の説明を聞いた上で自分の意見を言うのが「理解確認」だと思っています。そして、先生の説明と自分の意見を組み合わせてグループで話し合うのが「理解深化」だと思うので、この順のほうがやりやすいです。また、振り返りをすることで、その日に分かったことが自分でも

分かるので、この順がより授業の内容を理解できると思います。

- * 学習内容が理解できているかどうか、何度も確認することができるので良いと思いました。
- * ずっとやってきたことだから、いまいちは分からないけど、その日に習うことの全体を最初に教えてくれるので、だいぶよく分かる。説明のときにあまり分かっていなくても、確認や深化で先生に質問したり、友達の意見を聞いたりして、納得して覚えられる。
- * 段階を踏んで授業を進めることで、分かりやすいと思う。また、「理解深化」があることで、「理解確認」を比較的簡単だと思うときもあり、良かった。「深化」は難しいけれど、一人で考えるのではなく、グループやクラス全体で話し合えるから、知識の幅が広がる。数学が苦手なので、できることなら、もう少しゆっくり説明してもらおうと、もっと分かる。記号を使った問題など、目で追っているうちに次の問題に進むことがあるから。
- * 先生の説明の後に、すぐ確認をするので、ちゃんと分かっていたか自分で知ることができ、基本的なことを身につけることもできるのでいいと思う。「深化」があることで、そのことについてもっと深く知ることができたり、テストやワークなどで出る応用問題にも対応することができるので、助かっている。
- * 「理解確認」で、「教師の説明」を聞き本当に分かっているのかを知ることができ、その後に「深化」をすることで、学んだことを通して難しい問題を考え、ますます分かるようにしているからです。

2年

- * 「説明」や「確認」で理解し、「深化」でその理解した内容を使って、本当に問題が解けるかどうか自分自身で分かるので良いと思います。さらに、「自己評価」で自分が特にどこが分かったのか、確かめることができるので、良いと思います。
- * 「説明」が最初にあると、あとの「理解確認」がスムーズにいくのでいいと思います。数学の証明とかのときに、先生が図と証明を書く順番とか書いてくれるので、後にする問題を、(黒板に)書いてもらったのを見ながらできるから。
- * 数学では、先生の説明を聞いて、それが分かっているか問題を解いたりして、最後に「自己評価」をするので、分かってないところが分かって勉強できるのでいいと思います。
- * 説明を聞いて本当に分かっているかを確かめるために「理解確認」をしたり、それをもっと難しくして分かるかを確かめたりするので良いと思います。数学など、説明を聞いて「Q」などをして確認をして、その後練習問題をするので良いと思います。
- * 予習をして少し分かっていることから、先生の説明を聞いて理解できて、よく「なるほど」と思います。そして、本当に理解しているか確かめて、「深化」になると少し難しくなり、でも分かったときは嬉しくなります。「自己評価」では、自分がどこを分かっている、まだどこが分からないか知ることができるので良いと思います。
- * 自分がしっかりわかっているか確認ができて、それを使って次の「深化」をするのがとても良い。
- * 「教師の説明」で、今日することがなんなのかを知ることができ、「確認」では自分が分かっているかが分かり、「深化」で分かったことを深められるので良いと思います。
- * 「理解確認」で、もし内容のことが分かっている場合、ペアの人に聞いたりして解決することができるから、僕はいいと思います。
- * 数学で、自分が分からなかったところは、「理解確認」のときにどう考えたらその答えになるかということを教えてもらうことができるので良いと思います。

- * 初めに数学などであるように、分かりやすい問題などで解き方を先生が説明して下さった後に、「確認」で、個人で解いてみてペアで話し合うので、自分が分からないところを聞いたり、「深化」ではグループの人の解き方も知ることができて、知識が深まっていくと思うからです。
- * 説明→確認→深化 で、順番に難しくなっているから、分かりやすい。最後はグループで確認だから、自分が分からなかったところが分かるからいいと思う。
- * 「理解確認」や「理解深化」で、ペアやグループで活動すると、その日習ったことの中で自分がそれほど理解しているのか、また、友達の意見を聞き、「そのような考え方もあったのか！」と新しい発見ができるので良いと思う。数学や国語など、答えが一つだけではないという問題の時、このやり方だと役に立つと思う。
- * 「説明」をされることで理解しやすいし、「深化」などで人に説明することでもっと分かるようになるから。
- * 「理解深化」でグループでの話し合いで、分からないところが分かったり、一人ひとりの意見を聞いて新しい発見ができるから。

1 年

- * 分からない問題など、先生の説明でわかることがあるから。
- * 学んで、基本の問題を解いて、よく考える。という勉強法は、何度か問題を解くから、より頭に入る。最後の「自己評価」で、目標を振り返ることができるから、これはこう。と思い出せる。
- * 授業でわかったことを、「理解確認」や「理解深化」で身につけることができたから。
- * 小学校の授業は、今日勉強することを先生が説明して授業を進めていましたが、中学校に入ると、説明したことの確認問題をして、そこで分からなかったらもう一度説明して授業を進めているので、良いと思いました。また、その後、それを深めて「深化問題」をやっているので、分かりやすい。
- * 「教師の説明」→「理解確認」→「理解深化」という順番でだんだんレベルが上がる感じで、急にレベルが上がるのよりかは理解できると思う。「自己評価」は、今日習ったことを思い出す時間なのでいいと思います。

②の理由

2 年

- * 先生の説明の時点で、その意味が分からないと、「理解確認」の問題も「深化」問題も解けない。特に数学や理科は、分かんないのに先に進まれても困るとしか言いようがない。

品川委員御提出資料

第5回 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
教育課程企画特別部会

2015年4月15日

資料提出：教育ジャーナリスト

品川裕香

＜児童生徒の教育的ニーズに応じた選択的自由度の高い教育環境の整備し
犯罪学のいう動的リスク要因を下げ、保護要因を身につけさせることで
反社会的行動や非社会的行動など逸脱を予防し、将来、グローバル社会で
自立して社会参加し、社会貢献できる力をつける＞

1. これからの時代に求められる資質・能力について

①グローバル社会で自立して社会参加し社会貢献できる力に、犯罪学上の保護要因の準備と動的リスク
要因の軽減を教育に導入する

・インクルーシブ社会、グローバル社会と呼称はいろいろだが、要は異質な他者（文化、言語、性、宗教、障害等）といかに公平（equity）公正（fairness）につきあえるかと考える。

・これまでも会議で上がっていた汎用的なスキルやメタ認知が上がっていたが、筆者は将来の社会の変化を踏まえたときに、ベーシックスキル（体力・学力）を養い活用するのはもちろん、人としての質が高く（倫理や道徳、ルール等を守れて、良心が育っているか）と他者と協働できる社会性を持ち、課題を発見して解決するスキルを持ち、有象無象の情報に振り回されないcritical thinkingができるか等が必須だと考える。そして、これらは犯罪学でいうところの保護要因に当たる。

★ 一般的に少年が暴力などの反社会的行動や非行を働く可能性を増すものをリスク要因(Risk Factor)といい、リスク要因による被害の効果を減少させるものを保護要因(Protective Factor)という。リスク要因・保護要因に何が当たるかは学者によって微妙に異なるが、共通するものは非常に多い。
(リスク要因保護要因にはそれぞれ影響度の違いもある)

★★ リスク要因・保護要因ともに、本人・家族・学校・地域・その子が所属する集団の仲間と5領域ある。

保護要因もリスク要因もその運用に関しては限界があるものの、実践的に使用可能なツールとして使えるので、それぞれの領域で分析検討する。学習指導要領においては、特に、本人と学校、所属する集団の仲間の視点で検討することが必須である。

★★★ ちなみに、犯罪学ではリスク要因は個々の子どものニーズの裏返しとも指摘されている。

個人の保護要因（一部）

- 社会的能力及び問題解決スキルがある
- 積極的／打たれ強い／我慢強い性質
- 自己効力感がある
- 前向きの期待／将来への楽観
- フラストレーションに負けない
- 自分への高い期待
- 健康的で伝統的な信念と明確な基準
- 成人及び友人から社会的サポートを得ているという認識
- セルフ・コントロール力がある
- 楽観的な知性
- 目的を持っている
- 自尊感情がある

学校の保護要因（一部）

- ▶ 面倒見のよい支持的な成人の存在と関与
- ▶ 生徒に対する高い期待
- ▶ 学校の質の高さ／明確な基準とルール
- ▶ 学校への向社会的な関わりの機会
- ▶ 強力な学校への動機／学校に対する前向きな態度
- ▶ 生徒の社会的絆（教師に対するアタッチメント・ビリーフ・コミットメント）
- ▶ 平均を上回る学業成績
- ▶ 小学校4年生レベルの読み書きのスキル
- ▶ 感情的・行動的な問題を減少させるプログラムがある
- ▶ 子どもや家族を有意義な活動に参加させる
- ▶ 学習スタイルを考慮する
- ▶ 多重知能を重視する。芸術、音楽、運動競技を含めた豊かなカリキュラムを組み込む

個人のリスク要因（一部）

- 反社会的行動及び疎外／非行的な信念
- 一般的な非行への関与
- 薬物使用に関する寛容な態度／アルコールないし薬物の早期使用
- 攻撃性ないし暴力の早期発見
- 多動性がある
- 衝動性が強い
- 罪悪感・共感性の欠如
- 認知・神経的欠損
- 時間の感覚の欠如
- 不正直

- 暴力被害、暴力にさらされた経験
- 拒絶するスキルの低さ
- ストレスに弱い
- 感情（特に怒り）のコントロールが弱い
- 仲間からの拒絶
- 早期からの行動上の問題

学校のリスク要因（一部）

- ・ 学業成績の低さ
- ・ 学校への否定的な態度／結びつきの悪さ
- ・ 学校のまとまり・機能の悪さ／教師による否定的ラベリング
- ・ 中退
- ・ 学習障害者としての識別
- ・ 停学
- ・ 怠学・頻繁な欠席
- ・ 頻繁な転校
- ・ 小学校からの低い学力
- ・ 小学校3・4年生レベルの読み書きができない（←よって、社会適応をかんがえるとLDやDXはこのレベルまでは指導しなければならない）
- ・ 学校にいかない
- ・ ルールに価値を見出さない
- ・ 友達からの拒絶
- ・ 学校内での孤立
- ・ 早期の攻撃性（幼稚園から小学校3年生まで）
- ・ 教師との関係の失敗
- ・ モラルの低い教師／生徒
- ・ 教師の指導力不足

たとえば：保護要因のひとつとして

©Emotions are the protective factors (Vermont Study 2005)

©Goleman (2005) reported that, “scientifically,” a case can be made that “helping children improve their self-awareness and confidence, manage their disturbing emotions and impulses, and increase their empathy pays off not just in improved behavior but in measurable academic achievement.

Children who were able to control their impulses (emotional intelligence) at a very young age would experience better outcomes in later years than those with less self-regulation. They were able to restrain their impulses and analyze the situation, think about the alternatives, and choose the most advantageous course

©Goleman identifies five domains of emotional intelligence.

- ・ Knowing your emotions
- ・ Managing your emotions
- ・ Motivating yourself
- ・ Recognizing and understanding other people’s emotions
- ・ Managing relationships, i.e., managing the emotions of others

社会適応することを視野いれると、犯罪学でいうセルフ・コントロール(発達のすべてをマネージすること)の概念を導入したい

- 言語 (言葉がしっかり使える)
- 生活 (生活自立できるか)
- 規範 (倫理・道徳・法律等、社会のルールがわかっているか、守れているか)
- 感情 (衝動性や多動性、攻撃性)
- 行動 (衝動性や多動性、攻撃性) など

②人としての人格や社会的能力の高さを育てるための、規範教育 (犯罪学的視点からの) 導入

- ・ 犯罪学ではいじめ (反社会的行動という逸脱行動) は戦略的暴力であり、介入すべき課題。
- ・ 反社会的行動は定義が広い。万引きや暴力等法に触れる行為だけでなく、悪口を言ったりネットに書き込んだり無視したり排除したり他社の利益を奪う行動はすべて含まれる。
- ・ いじめが原因で不登校 (不登校は非社会的行動という逸脱行動) になるケースが後を絶たない。

③①と②を実質的な効果をあげるために学習レディネスを徹底指導する

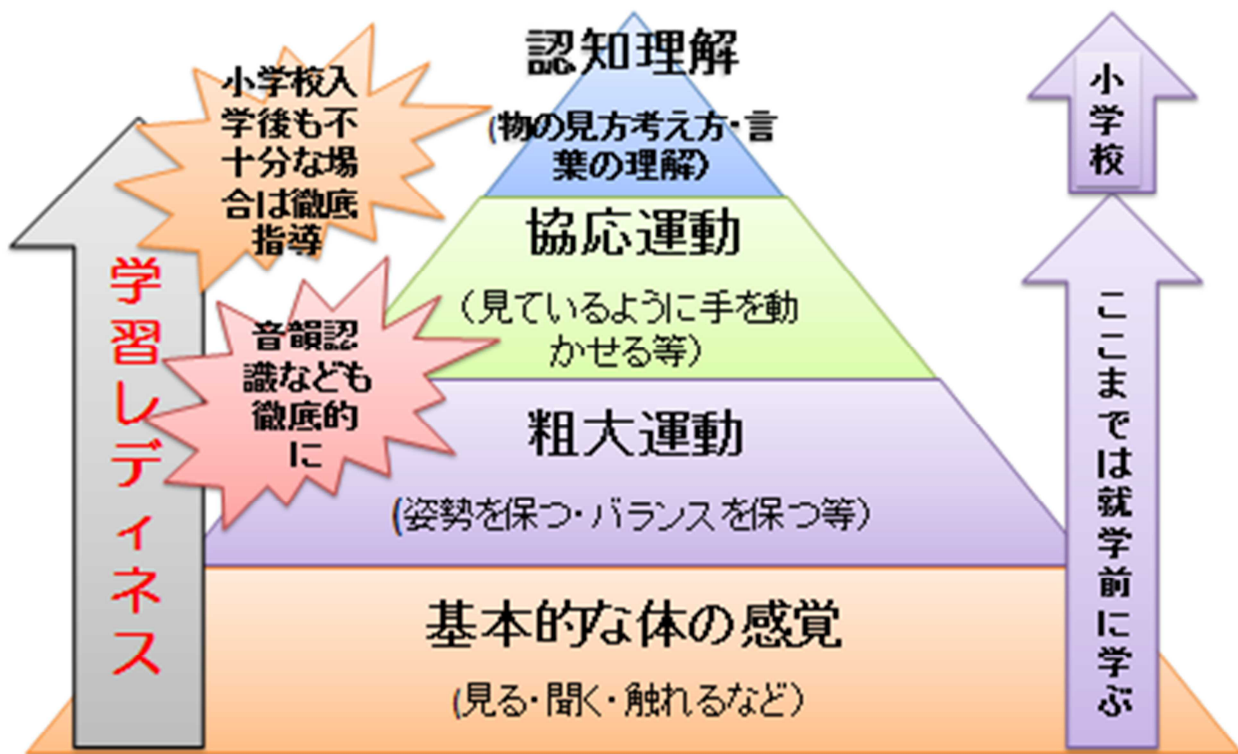
- ・ 学習レディネスとはあることを学習するとき、そのことを習得するために必要な条件が用意され準備されている状態。教育・学習が効果的に行えるような発達の素地。
- ・ 学習レディネスが養われていないと、教科教育が定着しづらいのはもちろんのこと、問題解決スキル等も身につくづらい。
- ・ 発達障害を持っていれば学習レディネスを徹底指導しないと教科教育が定着しづらいのはもちろんのこと、問題解決スキル等も身につくづらい。
- ・ 発達障害と診断されなくても、なんらかの生得的な偏りや環境要因的理由から学習レディネスが十分に育っていない児童生徒、および若者は決して少なくない。いわゆる「勉強ができない子」と呼ばれる子ども若者を多々取材してきたが、たいていはこの段階でつまづき、そのことを誰にも気づかれないまま「怠けている」「やる気がない」「家庭に問題がある」等他の理由にされて放置されてきている。その結果、保護者や学校はもとより、本人自身も「どうせ自分はできない」と思い、結果、反社会的行動や非社会的行動を取ったり、あるいは学校という枠組みを出たあとも自立したり社会参加したりできなくなるケースが非常に多い。私が取材してきた閉庁した宇治少年院や事件を起こすまえの広島少年院はこの段階での指導を徹底して行い、目覚ましい成果を上げていた。
- ・ 学習レディネスが養われていない段階で外国語を指導しようとしても効果は上がらず、本人の達成感も得られないため自己効力感も得られず、リスク要因が積み重なりやすい。

学習レディネス

- ① 見え方・聞こえ方かどうか
- ② 視空間把握はどうか
- ③ 聞いたことを理解する力(聴覚認知) はどうか
- ④ 見たことを理解する力(視覚認知) はどうか
- ⑤ 情報処理は同時処理が優位か継次処理が優位か
- ⑥ 注意力・集中力はどうか
- ⑦ 多動性・衝動性はどうか
- ⑧ ワーキングメモリや短期記憶(視覚的・聴覚的) はどうか
- ⑨ 言葉を理解する力(日本語技術力) はどうか
- ⑩ 認知の偏りはどうか

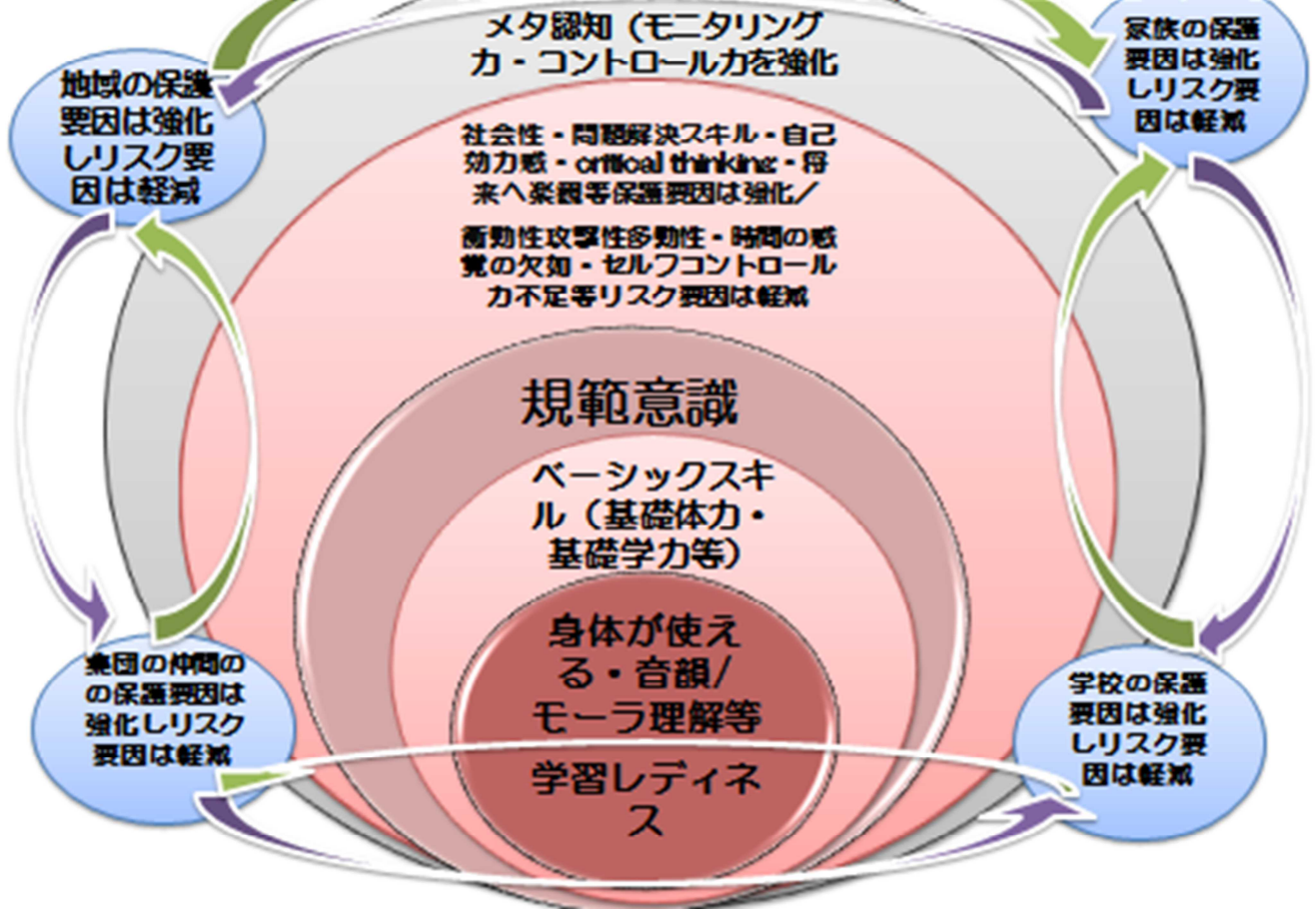
Office Yuka
Shinagawa, Tokyo
2004

個別的に脳の階層性(物事を理解するために 脳が踏む段階)を踏まえる©図版：竹田契一



今後、我が国の子ども若者に必要な資質と能力

個人の保護要因を強化し弾力を上げる



2. 1 を実践するための前提としてとしての指導

①学習スタイル(個々人の学び方の特性)の多様性に応じた指導

②専門的指導技術を応用した科学的根拠ベース(evidence based education)の指導

- ・いかなる先進的な教育実践であっても、個々の子どもの学習スタイルの多様性を踏まえた指導を行うことが大前提。どういう指導をするかは、個々の学校や教員が自分や集団に合った方法を選択できることが望ましいと考える。
- ・発達障害等生得的な課題を持つ児童生徒が10人に1人くらいいることや、不登校や保護者の都合等諸般の事情から未学習だったり不足学習だったりしている児童生徒のことを視野にいたった学習や指導を行わなければならない。
- ・現状、アセスメントができず発達を踏まえた行動観察ができる教員は少ない。また、各地の教育センター等でも発達課題を知らない心理職がまだまだ多い。そのため、子どもの教育的ニーズを発達から見ることができず、適切なIEP等が書けずにいる教育現場は非常に多い。あるいは、子どもを発達的な

課題からアセスメントしたり行動観察できたりするのもかかわらず、そういった教員にアセスメント等をさせず、WISCの総合数値だけを渡す心理職もまだまだ多く、現場の教員の不全感を高めている。いずれも、子どもの教育的ニーズを踏まえた実質的な指導に直結しない。こういったアセスメントや行動観察は障害の有無に限らない。能力が高く見える子どもや被虐待児、非行等全ての子どもの教育に必須である。

- ・指導のなかには「それをしたらさらに悪化する」といったエビデンスがあるものが多々あるが、そういったエビデンスが現状の教育界ではまだまだ生かされていないように思われる。たとえば、認知に偏りのある子どもに行動療法をすると悪化することが犯罪学ではエビデンスがありわかっているが、未だに多くの学校では「望ましいことをしたら褒めて、望ましくないことをしたら無視してあとから指導する」的なことが行われている。

2. これからの時代に求められる評価等

③学習スタイル(個々人の学び方の特性)の多様性を踏まえた評価の導入

- ・たとえば、現状では正しいノートの取り方をもって関心・意欲・態度の評価を行っている中学校が多いが、個々の発達課題を踏まえるとこれほど公平性公正性に欠く指導はない。正しいノートの取り方などないことが、本来の学習スタイルの多様性を踏まえた評価であることを指導する側は理解すべきである。
- ・別室受験や口頭試問、問題の代読等合理的配慮を行うためには、指導する側は「その評価は何を問うているのか」事前に明確にしておく(シラバスの作成など)必要がある。さもないと公平性公正性は担保できない。合理的配慮は生得的課題のある当事者や保護者の言いなりになることではない。

④相対評価と絶対評価の併用

- ・道徳や規範意識、生活態度は絶対評価に向かない。市民として守らなければならないルール等は障害の有無や能力の差に関係ない。
- ・絶対評価の在り方を今一度検討する必要があると痛感している。教科教育や特別活動などは、自分の目標を設定したら全体の偏差値は相対評価でつけられるが、分数が全然できない子が目標を60点にしてその目標を達成したら絶対評価としてA判定つけるなどと工夫が必要である。そうしないと、学習障害の子は能力や努力に応じた評価が得られず、知的欲求に合った進路指導を受けられない。これらはテスト手法をかせねばいいという問題ではない。

⑤対人関係・社会関係等スキル達成度評価

- ・現状では、対人関係や社会性等のスキルの達成度を絶対的に評価しておらず、担任の「印象」でのみの評価になる。ここに達成度評価を導入するのはどうか。

3. そのほか

⑥Critical Thinkingの涵養

⑦国語教育に日本語技術教育の観点を(そのうえでの英語教育)

- ・Critical Thinkingは、批判的吟味力と訳されるため誤解されやすいが、相手を「批判する」ことではない。情報を吟味分析し判断することである。Critical Thinking及びCritical Reading/Writingが日本語ででき、かつ科学的なCritical Thinkingと、言語技術的なCritical Thinkingの両方ができることが今後の社会を生き抜くうえでは必要である。
- ・そもそも人間は母語で思考し吟味し判断する。まずは母語の力を鍛えることが必須である。
- ・早期からの英語教育の必要性が盛んに叫ばれているが、音韻や文法等言語特性の違いを踏まえれば、早

くから英語を聴くことを否定はしない。しかし、日本語の語彙力不足、語用の力不足で結果的に不適応を起こす子ども若者たちを多数取材している筆者の立場からは、英語よりもまずは母語の語彙力や語用等ができることを優先すべきであると強く主張する。

- ・早期からの英語教育を導入する場合、どこをターゲットにおくのか明確にする必要がある。いうまでもないが、グローバル社会で生きる＝英語が話せる、ではない。
- ・余談だが、筆者は小学校2年から6年まで米国の現地小学校で学び、かつ1学年飛び級した経験もある。英語は不自由なく話せるが、それはあくまでも日常会話である。現在、英語で海外の教育現場や専門家の取材をし、来日する作家らの取材もし、かつ専門通訳や翻訳も行うが、それらを可能にしているのは日本語の言語技術と日本語による専門知識である。

4. この会議でのテーマではなく、チャレンジ的でもあるが……

【制度的・内容的には】

- ①個々の発達を踏まえ、小学校入学年齢は従来のまま入学後に教育的ニーズに応じた学びの場の保障
- ②小学校での実質的な学びを保障するために、就学前1年間を義務教育化して学習レディネスを鍛える
 - ・入学年齢は従来のまま、入学後に個々の発達に応じた学びの場を設置する
 - ⇒ フィンランドのような小学校内におけるスタートクラス(脳の階層性を踏まえた、学習レディネスをトレーニングするクラス。つまり、入学しても学習レディネスが育っていないと判断されれば体を使える、音韻を理解できる等訓練を受けられるような学びの場)の設置
 - ・障害種別だけではなく、脳の特性を踏まえた苦手さに応じた学びの場の設置(ワーキングメモリが苦手な児童生徒がそのトレーニングを受けられる場など)
 - ・就学前年齢5歳時には、脳の階層性等を踏まえたうえで学習レディネスのトレーニングを徹底する
 - ⇒ 音韻やモーラの理解ができているか(日本語言語技術の土台)、粗大運動・協調運動・巧緻性等体を使えるか等学びの土台を1年かけてとトレーニングしたうえで、小学校に入学するようにする
- ③個々の発達および実質的な学びを保障するため、中学校卒業年齢の自由化
- ④義務教育課程修了認定試験の導入
- ⑤義務教育年齢を過ぎても、義務教育課程を学べる場の設置
 - ・現状は「不登校等で学ぶべきことを学ぶべき時期に学んでいない⇒しかし、15歳になったから義務教育は終わり、中学校は卒業する⇒成人後、学ぶべき時期に学んでいないことがどれほど生きていく上で不利益を被るか実感するも成人が基礎基本を学ぶ場がほとんどない」。これは実質的に子どもの健全な成長発達権や教育権を保障していない。実際、筆者は「この卒業証書はキミには何の意味もない」と校長に言われながら卒業証書をもらった不登校生徒や非行少年を多数取材している。
 - ・塾等民間に学ぶ場はあるものの、多くは個々の発達を踏まえた丁寧かつ徹底した指導ではないため、現実的に成人後にベーシックスキルを身に着けることは非常に難しい。また、学ぶ場を見つけられたとしても、ベーシックスキルがないと安定就労が難しく、こういった有料の学校に通うこともままならない。これは成人後にディスレクシア等発達障害が判明した人たちも同様である。
 - ・何歳でもあっても、一つの単位(教科)からでも受験することが可能といった、義務教育課程修了認定試験を導入することで、実質的な学びを保障することができる。また、次に記すような、総じてバランスよく能力の高い天才型の児童生徒を救済することにもつながる。
- ⑥発達に応じた学習進度の自由を保障
- ⑦転校の自由(フリースクール等を含む)を保障

- ・現状では、発達的に課題のある児童生徒やスローラーナー等への学びの保障はなされているが、全てにおいてバランスよく能力の高い（能力的にも人格的にも）、いわゆる天才型の児童生徒の発達に応じた学習進度の自由が一切保障されていない。全体的にバランスの高い子に、その能力に応じた場で学ばせることはその子自身の幸福につながり、また社会にとってもメリットがある。現状のような平等主義的な教育は、結果的に指導内容がつまらなくて学校に行かなくなったり、反社会的行動を取ったりする等逸脱のリスクが上がると犯罪学ではエビデンスが出ている。
- ・gifted/talented もしくは2Eのようなアンバランスはあるが能力的に高いところもある児童生徒の場合は、高いところはより伸ばしながらも、アンバランス部分は発達に応じた場所で徹底的に学ばせる等工夫ができるようにしなければならない。gifted/talented もしくは2E の子どもたちほど、規範教育を徹底して行わないと反社会的行動や非社会的行動など逸脱行動につながりやすいとやはり犯罪学ではエビデンスが出ている。
- ・不適応を起こす子どもたちの学びを保障するために、フリースクールやホームスクール等学ぶ場を選べる自由を保障する。

⑧日本版 OFSTED の導入

- ・不登校の子どもたちの健全な成長発達権や教育権を保障するために、フリースクールやホームスクール等多様な学びの場を保障したい。そのためには、英国の OFSTED のような、抜き打ちで公立学校、私立学校、およびフリースクール等子どもたちの学びの指導内容の実際を確認し、それを情報公開するような国の機関が必要である。

この資料を提出した背景

① 能力や方法論に関する事例紹介や議論はあるが、加えて「資質」に対する議論を深める必要がある

これまで報告されているような教育観（手法を変えればどんな子も学べる等）だけでは、資質、つまり発達的なニーズや環境要因的（虐待や貧困等からくる等）ニーズを踏まえ、個々の学習のスタイルに応じて指導することが困難なのではないかと思われる。

⇒ 個々のニーズや学習スタイルに応じて指導すれば／受ければ成果が上がることを指導する側だけでなく子どもたちや保護者も共通して理解することが不適応を起こす子どもを減らす大事な要件であると考えられる。この理解及び実践が広がらなければ、異質平等を認めるインクルーシブ社会の実現は遠のき、また最終的に社会保障費も増えるであろう。

② 学力向上のエビデンスだけをもって理想的な教育モデルを議論するのではなく、犯罪学的視点からのエビデンスも生かした議論が必要である

一つの指導法ですべての子どもがわかり、できるようになる、という教育観は、個々の子どもの発達の特性を無視することになる。複数の、効果があると科学的に証明されたプログラムを導入することで、少しでも落ちこぼされる子どもを減らすことができる。

③ 会議の設置要件から考えると、今回のペーパーの4がチャレンジングであることは承知のうえであるが、

- ①現状の子どもたちが抱える課題と10年後20年後の社会の変化を踏まえた
- ②子どもたちの多様な学びを保障するという総理の国会答弁
- ③これまでの筆者の教育再生会議や過去の中教審、現在のフリースクール等検討会議での発言との整合性を考えたとき、制度変更提案は必至と考えたため、触れさせていただいた。

天笠委員御提出資料

カリキュラム・マネジメントについて

<諮問事項について>

平成26年11月「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(諮問)

○学習指導要領の理念を実現するための、各学校におけるカリキュラム・マネジメントや、学習・指導方法及び評価方法の改善を支援する方策についての検討。

・学習指導要領等に基づき、各学校において育成すべき資質・能力を踏まえた教育課程を編成していく上で、どのような取組が求められているか。

・また、各学校における教育課程の編成、実施、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントを普及させていくためには、どのような支援が必要か。

I. 平成20年「中教審答申」・平成26年「論点整理」とカリキュラム・マネジメント

◆平成20年1月の中央教育審議会答申(「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」)

○教育課程におけるPDCAサイクルの確立

○各学校においては、諸条件を適切に活用して、教育課程や指導方法等を不断に見直すことにより効果的な教育活動を充実させるといったカリキュラム・マネジメントを確立することが求められる。

○教育課程や指導についての評価とそれに基づく改善に向けた取組は、学校評価と十分な関連を図りながら行われることが重要。

◆平成26年3月の「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」

(1) カリキュラム・マネジメントの促進

○各学校においては、カリキュラム・マネジメントの確立が求められる。

○各学校において、カリキュラム・マネジメントを実践レベルにおいて実質化し、豊かなものにしていく必要がある。

○いわゆる「現代的な課題」に対応した「〇〇教育」のような各教科等横断的なテーマについても、カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、育成すべき資質・能力との関わりで、その内容を捉え直すことが求められる。

○現代的な課題の解決にあたって、各教科等の役割、教育課程上に位置付け、相互関係についての捉え直すことが求められる。

○学校運営の観点から、カリキュラム・マネジメントに関わる取組について、学校評価と十分な関連を図りながら行われることが重要。

(2) カリキュラム・マネジメントの促進を図るための教員への支援と環境整備

- 個々の教員への説明や資料送付など情報提供について充実をはかる。
- 国として、各学校のカリキュラム・マネジメントを促進するための資料の作成などを検討する。
- 各学校においてカリキュラム・マネジメントが適切になされるよう、教員の養成・研修や教育課程行政の中で、学校、教員、指導主事等の力量を高めていく必要がある。

Ⅱ. 教育課程とカリキュラム・マネジメント

◆『小学校学習指導要領解説総則編』（平成20年8月）に示される教育課程

学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。

◆教育課程（4層による構成）

- ① 教育理念・方針（ビジョン、校訓、めざす学校像、育てたい資質・能力、めざす児童・生徒像、本年度の重点目標、等）
- ② 組織配列した教育内容（各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動、各教科等の年間指導計画、等）
- ③ 配当した授業時数（日課表、週時程、月間行事計画、年間行事計画、等）
- ④ 教材・教具・施設・設備

◆カリキュラム・マネジメントについて

・学校教育目標の達成のために、教育内容を整え教職員の協働を促し諸条件の活用を通して、教育課程を編成・実施・評価し改善をはかる一連のサイクルを計画的・組織的に推進していく手法であり営みである。

・日々の授業や学級経営などの教育活動を学校教育目標の達成をつなげ、カリキュラムの計画（P）、実施（D）、評価（C）、改善（D）、を通して、教職員に学校組織の一員として、学校運営への参画を図っていくことである。

◆カリキュラム・マネジメント：3つの側面

第1の側面：各教科等間、教育内容の関連をはかる

各教科等が個々に展開されることを超えて、互いの関連をはかり、教育課程全体として効果をねらい、学校教育目標に迫るという発想や手法。

- ・各教科等をはじめ単元など教育内容相互の関連をとらえる
- ・教科横断的なテーマへのアプローチとしての発想や手法
- ・課題の解決に向けて各教科等の役割を明確にする
- ・教育課程全体をとらえる

第2の側面：教育課程のPDCAサイクルを確立する

カリキュラム・マネジメントについての中核となるとらえ方。教育課程を編成して実施・評価する取組が相互に連動して一体のサイクルを形成しているというよりも、それぞれが分断し分離してなされる実態も認められる。

- ・学校の教育目標の存在と達成を意識化する。
- ・学校の教育活動の全体計画の作成。
- ・授業の立案と実施
- ・単元・指導計画のチェック
- ・学校評価と関連づける

第3の側面：教育課程と諸条件の活用・整備とをつなぐ

教育課程をヒト・モノ・カネ・情報など経営資源との活用との関連でとらえ、効果的な教育活動をめざす考え方であり手法である。“教育内容系列と条件整備系列”といった言い方がされることもある。

- ・教職員の協働
- ・個々の授業をはじめとする教育活動を学校全体の取組に
- ・諸条件の整備と適切な活用による、効果的な教育活動を実施
- ・経営資源の配分と投入
- ・校長をはじめとするスクールリーダーやミドルリーダーのリーダーシップ、

Ⅲ. カリキュラム・マネジメント：普及のための方策

<教育現場の実情：実践家のレポートより>

カリキュラム・マネジメントという発想や手法が、多くの学校や教職員に受け止められるには、取り組まねばならない課題が存在している。

・「日々様々な工夫をしながら教育活動を実践している教師もそれがマネジメントだという意識はない。…個々の教師が『木を見て森を見ず』的な考えでいることが多いため、そこにマネジメントの視点が生まれてこないと感じている。」

・「現実の学校現場では、教師にとって、『カリキュラム』はあたかも透明のごとく見えていないし、またその存在すら定かではない。なぜこのような姿になってしまったのだろうか。この解答は、自分自身が『カリキュラム・マネジメント』を知ることがなかった、かつての教員としての歴史でもある。」

・「手厚いサポートが、教師のカリキュラム・マネジメント意識も失わせる結果になっている側面は否めない。」

<カリキュラム・マネジメント：普及のための方策>

<方策1>

- ① 教職員が抱いている教育課程についてのイメージを豊かにする。
- ② 学習指導要領を豊かに読み取る。
- ③ 授業などの教育活動と単元や指導計画、さらに教育課程との往還を促すシステムを整え、その運用を図る。
- ④ 教育課程の計画・実施・評価を通して、教職員に学校経営への参画を促す。
- ⑤ 校内における教職員の協働の核を教育課程に求め、協働をはかる組織文化を培う。
- ⑥ 教育課程評価の結果を学校改善・授業改善につなげる。

<方策2>

- ① 学習指導要領総則の検討：カリキュラム・マネジメントをめぐる実践を生む観点から総則の在り方を次の点から問い直す。
 - ・教育課程全体を通して具体化・実質化をはかる
 - ・教科横断的なアプローチを促す
 - ・教科等間の相互の連携の促進
 - ・校種間の連携の円滑化
- ② 学習指導要領等の基本的な考え方について、教育内容、学習・指導方法と学習評価を一体的に進めていくにあたって、マネジメントの在り方を追究する。

<方策3>

- ① 単元及び指導計画を授業者自身が振り返り、チェックする簡便な手法を開発するとともに、教育課程のPDCAサイクルに位置づける教育現場の実態に即したシステムやマネジメントの研究開発を進める。
- ② 授業や単元などミクロな設計と年間指導計画や教育課程全体といったマクロな設計を往復させる手順やシステムの研究開発を進める。

<方策4>

- ① 教育課程について共通理解をはかり、3つの視点からカリキュラム・マネジメントの習熟をはかるために、教員養成・研修に関わるカリキュラム及びプログラムを見直す。なによりも、教員研修プログラムの早急の見直しが必要。
- ② カリキュラム・マネジメントを指導助言できる指導主事などスクールリーダーの養成を進める。
- ③ 好事例の収集と発信：国として、「カリキュラム・マネジメント事例集」の作成。

<方策5>

- ① 特定の教科等を取り上げる校内研修から、複数の教科等を取り上げる校内研修への転換。
- ② 複数の教科等の相互の関連を捉えながら教科横断的な課題に迫る校内研修。
- ③ 育てたい資質能力を掲げ、複数の教科等の相互関連を捉えながら、その探究をはかる校内研修。
- ④ 総合的な学習の時間を核に、複数の教科等を関連させながら進める校内研修。